

みえ現場 de 県議会「ものづくり産業振興」の実施概要

- 1 日時・場所 平成25年2月1日（金）14：30～16：30
高度部材イノベーションセンター（AMIC） 1階 PRホール

- 2 テーマ 「ものづくり産業振興」

＜テーマの選定理由＞

県民の暮らしを支える産業のひとつである、ものづくり産業の抱える課題や可能性について、幅広くご意見をいただき、今後の議会での議論に反映していく。

- 3 参加者

＜県民＞ 12人 ※企業関係者8人、教育研究関係者2人、団体関係者2人

＜県議会＞ 12人 ○印は広聴広報会議委員

山本教和議長、○舟橋裕幸副議長（広聴広報会議座長）、○下野幸助議員、
○藤根正典議員、○石田成生議員、○大久保孝栄議員、○中西勇議員、
○水谷正美議員（教育警察常任委員長）、○中村欣一郎議員、○村林聡議員、
辻三千宣議員（戦略企画雇用経済常任副委員長）、
服部富男議員（戦略企画雇用経済常任委員長）

＜傍聴議員＞ 9人

＜傍聴者＞ 5人

- 4 プログラム

1. 開会 挨拶（山本教和議長）
2. 趣旨説明 舟橋裕幸副議長（広聴広報会議座長）
3. ものづくり産業振興に関する県議会の取り組み報告
（戦略企画雇用経済常任委員長、教育警察常任委員長）
4. 意見交換
5. まとめ 舟橋裕幸副議長
6. 閉会 挨拶（山本教和議長）

5 意見交換での主な意見

事業者等の連携

- 産学連携を強く意識したのは40年前。小さい企業が研究機関を社内に持つことは不可能で、何とか学の力を借りたいということで、色々なところに足を運んで糧にしてきた。14、5年前から官も加わって、これが結集したのがAMIC。
- 連携は既に何十年も前からやってきている。協力してもらったり、共に開発したり、SSY（試作サポーター四日市）を立ち上げたり、SSYの中でもグループを立ち上げたりしている。原点は人のご縁、テーマとの出会い。それをいかにやってみるか。大企業も含めて、パワーが落ちてきてトライがやりにくい環境にある。中小企業は会議なし、稟議なし、ハンコなしで、やろうと思えばすぐにやれる。
- 三重大学と連携ができて良かった。自社だけで開発は不可能だったが、三重大学との連携で見えてきた。中小企業が気軽に手を伸ばせる窓口が必要。
- ライバル社は連携によりコストを下げているが、連携は責任の所在という点で怖く、顧客に出しにくいところもある。メリット、デメリットを知りたい。
- 産学官連携で三重大学がきちんと働けるようになったのは最近。国立大学ということで、若干、地域と距離をおいていた時期もあったと思うが、独立行政法人化してから、地域の大学として、「地域と共に生きる」という立ち位置を学長が明確に出している。三重大学では「社会連携研究センター」が連携の窓口である。
- 連携のステージが変わってきている。トレンドが大きく変化すると、商品を変えないといけないが、自社で全部を組み合わせるのは追いつかない。一点抜けて世界に通用する技術をもっているグローバルオンリーワンの企業が集まって結果を出すことが必要。戦略的にコーディネーションするのは行政も重要だが、そこに大学が協力しないといけないということで、地域戦略センターというシンクタンクを作った。これが次のステージの産学官連携。地方大学でここまで踏み込んだ大学はないと自負している。
- 生産量でお茶は全国3位、焼き物は5位という良い環境にありながら、かみ合っていない。三重県の重要なポイントにしてもらえれば活性化できるのでは。
- 農林水産の豊富な資源を活かし、三重県という切り口で土鍋料理をアピールできないか。
- 国内にとどまらず、海外で流行らせることにも目を向けていくことも大事では。
- 三重県に行かないと食べられないという名物を作ることが必要。
- 研究者の意識改革も必要。相談に応じて研究費を付けている高専（高等専門学校）もある。

人材育成・供給

- 鈴鹿工業高等専門学校は就職と編入が半々で、就職の状況は良い。地元に残りたいという学生もあり、最近では、地元の企業に来ていただいて紹介ブースを出してもらったりしている。地元企業と接する機会が多くなれば、地元で勤める学生が増えてくると期待している。
- 桑名工業高校はかつて、地元で就職しなかったし、採用いただけなかったこともあった。商工会議所と先生が懇談会をやって、生徒に工場を見学させたら目の色が違ったということで、これはもったいないということでインターンシップを始めた。
- 桑名でうまくいったのは、高校生を受け入れてくれる企業を先生が探すのは大変であるため、そこを商工会議所が担い、その期間、先生は企業へ送り出しても恥ずかしくないよう生徒を指導してもらった。
- 地元の企業を自分の目で見られるので、「あの社長となら一緒に仕事がしたい」「あの会社なら一生勤まる」というふうに自分で判断ができるようになり、地元への就職が増えた。いずれは就職につながるようなインターンシップの制度が必要ではないか。
- デュアルシステムとインターンシップについて、それぞれを担当する県の組織の中で共通認識を持ってほしい。
- 技能検定を取って就職しても、企業の事情もあり違うスキルを勉強することもたくさんある。企業は即戦力を求め、今まで10年かかったところを3年でということもあるが、少し長い目で見て育ててほしい。
- 年間1～2名桑名工業高校等の生徒を預かっているが、改善のきっかけを作ってくれることもある。
- 全員が中途採用の企業であり、教育部門がないので、OJT（On the Job Training：職場内訓練）で一人育ったらまた一人という形。新卒を採用するためには、身近に瀬戸の施設（中小企業大学校瀬戸校）のような、教育の場があると助かる。
- 高卒でも大卒でも一人前になるには長期間かかり、その間は投資になる。そのため、働き盛りの人をヘッドハンティングせざるを得ない状況がある。
- 学生時代にもっと専門的な教育が必要。中学から始めて、高校では専門をやり、大学へ、というくらいでないと日本の技術が減ぶ。
- 大学4年間で中小企業のものづくり系の技術を教え込むのは難しい。地域としての仕組みがあっても良いのかもしれない。
- これだけの人を大学に行かせて良いのか、という気もしている。進路の中に、ものづくりの工業高校に行って技術を身につけることにプライドが持てる雰囲気作りも必要。

- 大学では高度な研究者を育成したいという教員も多いが、学生は意識が変わってきている。4年間、大学生1年生に毎週地元の社長の話を聞かせる講義をしているが、効果があることが分かり、大学として重要視している。
- 地域イノベーション学研究科という大学院を作り、地元の社長に講師として来てもらい、4週間のインターンシップもやっている。これで地元企業への就職率が100%近くになってきている。学生たちに三重県のことを良く知らせることは重要かもしれない。そうすると地元の企業で働くにはどういう力をつけたらいいかを意識しながら自主性を持って学べるのではないか。
- 大学からでは遅いという考えから、高校生セミナーも3年ほど前から行っている。
- 相可高校の高校生レストランが有名になったが、工業高校で第三セクター方式で工場経営ができないか、という夢を持っている。

6 参加者アンケートによる意見（原文掲載）

【会議の感想】

- 施設見学の時間を参加者と県議会議員とフリートーキングがしたい。
- 異業種の意見を聞け、有意義だった。
- 産学の現状が参考になった。
- 聞いていただく機会を設けていただき、有意義な時間だったと思います。御縁を続け、具体的に連携した実績になればと思います。
- 県議会議員各位にAMICへの認識を深めていただけたこと。産官学の連携の重要性を知っていただけて大変嬉しく思う。

【みえ現場 de 県議会のあり方】

- テーマをもう少し絞り込み、その内容を精通した人の参加を望みます。
- 企業参加者3名程度、教育関係1名、団体関係1名で、発言時間をもう少し与えてほしい。
- 今後も続けていただきたい。
- 市民の方も聞けるような会とするのも良いのではと思います。
- 現場の現場も有りか。
- 次回は是非、ばんこの里会館で開催して頂ければ嬉しいです。
- 議員各位が現場に足を運んでいただくことは大変意義あることと思う。今後もこんな場を催して、我々産業界の実情に御理解を賜りたい。